

毎年恒例の「エコノミストが選ぶ 経済図書ベスト10」の結果がまとまった。官民で議論が進む「働き方改革」に関心を持つ選者が多く、雇用や労働の問題を、理論とデータの両面から分析した秀作が並んだ。メガバンクが大規模な人員削減の計画を発表し、金融機関の先行きが不透明さを増す中で、金融を立て直す方法を提言する本が上位に入った。

大差で1位に輝いたのは『人手不足なのになぜ賃金が上がらないのか』。福田慎一・東京大学教授は「本書のタイトルは低インフレが続く今日の日本経済における最大の矛盾の一つ。研究者がそれぞれの観点から考察し、解答を導き出している点が興味深い」と推薦の理由を説明する。

『金融に未来はあるか』のジョン・ケイ/飯井真澄訳、ダイヤモンド社、2400円。『スティグリッツのラーニング・ソサイエティ』のジョセフ・E・スティグリッツ/数下史郎監訳、岩本千晴訳、東洋経済新報社、3200円。『データ分析の力』の伊藤公一朗、光文社、780円。『「原因と結果」の経済学』の中室牧子、津川友介、ダイヤモンド社、1600円。『正規の世界・非正規の世界』の神林龍、慶応義塾大学出版会、4800円。『現金の呪い』のケネス・S・ロゴフ/村井章子訳、日経BP社、2800円。

## エコノミストが選ぶ 経済図書ベスト10

# 「働き方」理論とデータで分析

回顧

2017

**経済図書ベスト10**

**1** **人手不足なのになぜ賃金が上がらないのか**  
著者 玄田有史編  
出版社 慶応義塾大学出版会  
価格(税抜き) **2000円**

**2** **働き方の男女不平等 理論と実証分析**  
著者 山口一男  
出版社 日本経済新聞出版社  
価格 **3200円**

**3** **錬金術の終わり**  
著者 マーヴィン・キング/遠藤真美訳  
出版社 日本経済新聞出版社  
価格 **3200円**

**4** **日本の人事を科学する**  
著者 大瀧秀雄  
出版社 日本経済新聞出版社  
価格 **2300円**

**5** **金融に未来はあるか**  
著者 ジョン・ケイ/飯井真澄訳  
出版社 ダイヤモンド社  
価格 **2400円**

**6** **スティグリッツのラーニング・ソサイエティ**  
著者 ジョセフ・E・スティグリッツ/ブルース・C・グリーンウォルド/数下史郎監訳、岩本千晴訳  
出版社 東洋経済新報社  
価格 **3200円**

**6** **データ分析の力**  
著者 伊藤公一朗  
出版社 光文社  
価格 **780円**

**8** **「原因と結果」の経済学**  
著者 中室牧子、津川友介  
出版社 ダイヤモンド社  
価格 **1600円**

**9** **正規の世界・非正規の世界**  
著者 神林龍  
出版社 慶応義塾大学出版会  
価格 **4800円**

**9** **現金の呪い**  
著者 ケネス・S・ロゴフ/村井章子訳  
出版社 日経BP社  
価格 **2800円**

## 金融再生への提言にも注目

の綿密な実証分析であり、労働経済学の新しい分野を切り開いた」とみる。

労働・雇用問題の専門家の間で評価が高かったのが『正規の世界・非正規の世界』だ。清家篤・慶応大学教授は「正規と非正規労働の実態を精緻な理論と統計資料によって客観的、科学的に解き明かして

いる。著者の研究の集大成といえる力作で、これからの労働経済学研究的なマイルストーンとなるべき一冊」と上位に挙げた。

ノーベル経済学賞を受賞したジョセフ・E・スティグリッツ・ソサイエティ大学教授の著書には根強い人気がある。6位に入った『スティグリッツのラーニング・ソサイエティ』の副題は「生産性を上昇させる社会」。嶋中雄二・三菱UFJモルガン・スタンレー証券参与・景気循環研究所長は「今の日本は製造分野で培った優れた能力を十分に別の分野に転換できずにいる。新しい産業政策を構築し、人や研究への投資、ラーニングを生かすことこそ日本の探るべき道だ」という結論に納得する」と強調する。

スティグリッツ氏の著書も含めると、今年のベスト10のうち、雇用や労働の関連が5冊を占めた。エビデンス(証拠)に基づく分析を前面に出す傾向があり、最近の経済学ひいては社会科学の潮流を反映している。

原則として2016年12月～2017年11月に刊行された書籍を対象  
選者にそれぞれベスト10をあげてもらい、順位の高さや推薦者の数などを基にランキングを作成した

エビデンスに基づく分析とはどんな方法なのか。一般の読者に分かりやすく解説した啓蒙書も票を集めた。

『データ分析の力』を推すのは土居丈朗・慶応大学教授。「データをどのように分析すれば因果関係を明らかにできるかを教えてくれる。電力、医療、税金など経済取引にまつわる原因と結果の関係を適切に分析する方法を平易に解説している」と入門書として最適だとみる。小川進・神戸大学教授も「最先端のデータ分析を一般の人が分かる形で解説している啓蒙書でありながら学術的にも高いレベルの良書」と太鼓判を押す。因果推論の方法を解説した『「原因と結果」の経済学』も8位に入った。

金融の本質を解き明かした本が上位に入ったのも今年の特徴だ。『錬金術の終わり』はその代表。奥村洋彦・学習院大学名誉教授は「従来の経済理論や政策当局が依拠した経済モデルには致命的な欠陥があり、金融の錬金術が経済に深刻な悪影響をもたらしたと、自己反省も込めて吐露。経済のどらえ方、政策運営に再構築を迫る貴重な作品だ」とコメントした。

選者は次の15人(五十音順)  
▼岡崎哲一(東大教授)▼小川進(神戸大教授)▼奥村洋彦(学習院大名誉教授)▼川本裕子(早大教授)▼鹿野嘉昭(同志社大教授)▼地主敏樹(神戸大教授)▼嶋中雄二(三菱UFJモルガン・スタンレー証券参与・景気循環研究所長)▼清家篤(慶応大教授)▼宅森昭吉(三井住友アセットマネジメント理事・チーフエコノミスト)▼寺西重郎(一橋大名誉教授)▼土居丈朗(慶応大教授)▼根井雅弘(京大教授)▼福田慎一(東大教授)▼藤田康範(慶応大教授)▼八代尚宏(昭和女子大特命教授)

本の金融システムの将来を考えるために、バランスの良い手がかりを与えてくれる。大企業の資金需要がなくなった状況を適切に踏まえて金融の肥大化を冷静に把握し、資産運用業に将来を見ている」と同書の「実用性」を評価する。

『現金の呪い』を強く推したのは藤田康範・慶応大学教授だ。「高額紙幣を廃止すれば地下経済での経済取引が減少する、紙幣を廃止すればマインナス金利政策の実効性が高まる」との帰結が衝撃的だ。キャッシュレス(現金のない社会)ではなく、レスキャッシュ(現金の少ない社会)への移行を提唱している点にも卓越した現実感覚を読み取れる」と解説する。

理論やデータをしっかり押さえ、現実に応じている問題を分析し、明確な処方箋を示す。選者たちは、議論の土台を提供するような、地に足のついた本を求めている。惜しくもベスト10入りを逃したのも含めて、高いハードルを築々と飛び越える本が多い、豊作の年だった。

(編集委員 前田裕之)